様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 23 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５２０３０１
研究課題名（和文）19 世紀フランス文学・音楽における自我と世界の表象

研究課題名（英文）Representation of the world and ego in the 19th century French literature and music

研究代表者
博多　かおる（HAKATA KAORU）
東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授
研究者番号：60368446

研究成果の概要（和文）：
共同体の象徴を担ってきた音の中には、19 世紀の文学作品と音楽作品において「音の印象」として解体されたものがある。また 19 世紀前半には、街路の音が登場人物と読者によって読み解かれるべき記号である例も多いが、外界の音を描写することにより、知覚と記憶の流れの関係を分析することの重要性が増していく。さらに、複製技術、間接的通信手段の発展が、芸術作品における読者や聴衆の位置を通信相手の延長上に置くという発想をもたらし、作品構造にも影響を与えたことを検証した。

研究成果の概要（英文）：
In the 19th century musical and literary works, some sounds which originally symbolized the identity of the community are reinterpreted as the “impression of sound”. In early 19th century, the sound of the street often functions as a symbol to be decrypted by the characters and the readers, but it will be more than more important to analyze the relationship between memory and perception through the depiction of street sounds. The development of replication technology and indirect communication inspired writers and composers to position the readers and listeners as if they were an extension of the communication devices’users, which has an impact on the structure of literary and dramatic pieces.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,000,000	300,000	1,300,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文社会
科研費の分科・細目：人文学
キーワード：ヨーロッパ文学

１．研究開始当初の背景

平成 22 年度以前に行った 19 世紀フランスの感覚風景の変化についての研究を、文学・音楽作品と社会的背景の関係に着目して掘り下げ、近代的自我のかたち、人間と世界の関係を探る必要があると考えた。具体的には、19 世紀ヨーロッパで互いに大きな影響を与え合いながら発展した文学と音楽が映し出す聴覚的な感性の変化をふまえて、近代的自我のかたち、人間と世界の関係を探ることに意義があると考えられた。文学と音楽の関係一般については、さまざまな先行研究が存在するが、社会における音に対する感性の変化をふまえ、文学・音楽作品の詳細な読解をもとに、自我と世界の表象を十分に分析している研究は存在しない。したがって、その欠落を埋めるべく、研究テーマを設定した。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀前半のロマン主義から後半の象徴主義に至るまでのフランス文学作品を音楽作品との関係において分析し、近代的自我の発展、個人が世界と取り結ぶ関係の変化を読み解こうとするものである。文学作品と音楽作品の着想・構造に深く及んでいる呼応関係を探り、自己同一性の問題、人間が自然・都市と取り結ぶ関係、伝統的な象徴体系の解体とあらたな構築を解き明かすことを目的としている。人間と世界についての認識が次々と塗り替えられ、それを描く作品の創作・受容条件も変化していったこの時成果代の文学・音楽を、人間存在の内面的変容と芸術言語の革新に着目して読み解き、近代芸術が描き出した人間と世界の関係を考察する。

３．研究の方法

先行研究を踏まえ、19 世紀刊行物を調査した上で、19 世紀の社会的・歴史的動向と芸術的潮流の変遷を多方面から考察した。文学作品と音楽作品の詳細なテクスト分析（音楽作品の場合は音声・画像資料も対象とした）に基づいて、文学・音楽の関連から読み取ることのできる個人と世界の関係を明らかにすることを試みた。

まずは、自己同一性の問題を、先行研究を踏まえ、ロマン派における重要な問題として取り上げた。文学に顕著に見られる自我の輪郭の曖昧化や分裂、一人称の語りを、音楽における聴覚的効果の革新、モチーフの多重化やリズムの複雑な組み合わせと比較しながら分析した。

次に、社会的に重要な象徴を担う音の要素の表象についての研究を進め、鐘の音を扱った文学・音楽作品の分析を進めた。特に、鐘の音と共同体の関わりについて、歴史的資料・歴史・社会学の研究書等を通じて調査を行った。その上で、19 世紀フランス文学（特にヴィクトル・ユゴー、セナンクール、ピエール・ロチらの小説）、及び重要と考えられる音楽作品を対象に、鐘の音の分析を行った。音楽作品については、19 世紀前半から後半にかけて複数の鐘にまつわる作品を書いている作曲家リストの作品、また鐘の音を革新的な方法で音楽作品に取り込んだベルリオーズの『幻想交響曲』、シューマンの『パピヨン』等を研究の中心に据えた。

さらに、交通の音や街路の音の表現を表現している音楽・文学作品を、語彙検索や先行研究の調査をもとに抽出し、そこにおける自己の意識と世界の関係を、詳細なテクスト分析によって明るみに出すことを試みた。アルカンによるピアノ練習曲『鉄道 *Chemin de fer*』などに見られる 19 世紀後半の新しい交通手段の音楽的表現、またネルヴァル『シルヴィー』からピエール・ロティ『ラムンチョ』、プルースト『失われた時を求めて』に展開される交通の音と想像力の関係について調査を進めた。シャルパンティエのオペラ『ルイーズ』やプッチーニのオペラ『ボエーム』における街路の物音の表現も比較の対象とした。

また、19 世紀から 20 世紀にかけての文学・作品における外界の音、特に街路の音の表象について調査を行い、室内と公共空間の関係という、近代小説における一つの重要な問題軸と関連づけて論じた。19 世紀までのヨーロッパにおける都市のサウンドスケープで、量、頻度ともに他をしのいで音風景の基調と特徴を作っていた馬車の音と物売りの声に関して、文学・音楽作品の分析を行った。主にバルザック、プルーストの小説を対象に、中世の合唱曲からシャルパンティエによるオペラ『ルイーズ』（1900 年）までを資料として、街路の物音、特に通りを巡回する物売りの声について研究を進め、成果を論文にまとめた。複製技術、間接的通信手段を通した個人と外界、個人と読者（観衆）の関係についても、同様の方法にもとづき調査と分析を行った。

４．研究成果

鐘の音が誕生、結婚、死などを告げ、人間の生活のリズムを刻み、共同体の人々の聴覚に密着し、感情的な絆を生み出していたことはすでに指摘されている。本研究は、そうした絆の大部分が一度すでに解体されていた19 世紀のある時期において、鐘へのノスタルジーが強まること、ロマン派的な想像力への信頼によって、想像の領域に鐘の響きを移し替える作業が行われたことを明らかにした。さらにロマン派は、グロテスクなものを称揚する中で、鐘の響きやそれが表す力をフィクションの領域に引用し、パロディー化して、聖なるものや日常と対峙する力（悪魔や異空間）と大胆に関連づけた。そして、複数の次元に響く鐘を聴く位置に個人を置くことによって、分裂する自我を表した。さらには、鐘の音が芸術作品の中で情動や風景描写と深く結びついていた時期から、鐘が単なるモチーフ、音の模様となり、さまざまな音の効果を探求するために用いられた時期への変化が読み取れることも注目に値する。19 世紀後半から、鐘の音の新たな象徴的役割も創造されていく。鐘の音を通して、ロマン派的な感情の吐露や自我の風景への投影から、音の響きの「印象派的」な探求へ、さらに鐘をめぐる新たな象徴の発達へという移行を読み取ることができる。論文では、大革命以前は宗教的・社会的な役割を果たしていた鐘の音が、空間的・時間的神話を積み重ねながら、「音の印象」として解体され、記憶の濾過を経た風景の表象の一要素となっていく経緯を論じた。こうした文脈を経て自然の音に新しい表現を与えたドビュッシーの音楽作品についても考察を行った。象徴派や印象派の影響を受けつつ、古代に遡る時間的想像を通して風景を描くドビュッシーの試みを分析した。

続けて、バルザックの文学作品において噂など外界の雑音が、自己像、他者像の形成に与える影響を分析し、日本バルザック研究会主催のシンポジウムで発表した。

次に、近代文学の発展において重要な軸である街路と室内の関係について研究を展開した。16 世紀から存在する、物売りの声に言及する音楽作品や文学作品では、外界の音を展示するかのように示す試みが見られる。19 世紀前半の文学においては、街路の音が登場人物と読者によって読み解かれるべき記号としての機能をもつ例も多い。当然、音はそれが発された外界とそれを聞き取る人間の感性の交流を生み出すが、20 世紀初頭の文学作品には、外界の音を描写することにより、知覚と記憶の流れの関係を分析する場合が見られる。そうした場合、音の知覚が不在なものを個人の内的想像のなかに蘇らせることがある。これらの例を主にプルーストの作品を対象として分析した。

また、社会の産業化や機械化が人間の想像力に与えた影響の一端を検討した。街路の物音が、読み解くべき記号としての機能をもつだけでなく、知覚の働きを記憶の流れと連携させ、遠い場所や離れたところにあるものを想像の感覚のなかに蘇らせることを指摘し、音が内と外の敷居をまたぎながら、此所と別の場所、現にあるものと失われたものをつなぐプロセスを分析した。時空の広がりが個人の想像に映し出され、自己存在が音の知覚と記憶との交錯において記録される一つの特徴的なあり方が見て取れた。

最後に、複製技術、間接的通信手段の発展とこの時代の音楽・文学作品の関係を探った。プルーストの小説における電話の役割、トゥシャトゥによる『忙しい人のための電話で語るゾラの小説「パリ」』、コクトーの『人間の声』などを対象に、電話と声、語り手と聞き手の関係を分析した。電話という発明が、空間的距離に新たな意味と感覚をつけ加え、身体と声の関係の意識化をうながしたと同時に、小説・音楽作品の構造内にも新しい要素を生み、語り手と潜在的読者／聴衆の関係を、通信装置との関係において演出することを可能にしたのを見た。これは、通信技術との関連において、個人と世界の関係に一つの光を当てる試みとなった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 「街路の音と室内空間― バルザック、プルーストの小説におけるパリの物売りの声とその周辺」，博多かおる，単著，査読なし，『東京外国語大学論集』84 号，pp. 1-20，2012 年.

② 「天空の音楽から音の模様へ―リスト・ベルリオーズ・ユゴーにおける鐘」，博多かおる，単著，査読無し，『東京外国語大学論集』82 号，pp. 21-33，2011 年.

③ 「バルザックにおける歌」，博多かおる，単著，査読なし，『仏語仏文学研究』42 号，pp. 5-16，2011 年.

④ 「ゴーチエとベルリオーズにおける「幻想」と自我の複層性」，博多かおる，単著，査読なし，*Les Lettres francaises*，30 巻，pp. 93-103，2010 年.

〔学会発表〕（計３件）

① 「クンデラ小説の対位法と変奏」，博多かおる，単独発表、指名、シンポジウム「ミラン・クンデラ　主題と変奏」，国

内会議，東京外国語大学総合文化研究所主催，口頭，東京外国語大学，2012年6月30日.

② 「歌曲「夏の夜」をめぐって―声、語り、不在、 幻想―,博多かおる，単独発表，ソフィア国際シンポジウム「テオフィル・ゴーチエと 19 世紀芸術」，国際会議，上智大学フランス文学科,上智大学四谷キャンパス2号館17階、国際会議場，2012年5月19日.

③ 「バルザック小説におけるメディアと想像力」，博多かおる，単独発表，日本バルザック研究会，一橋大学国立キャンパス，2011年5月28日.

〔図書〕（計１件）

① 『フランス文化事典』，共著,丸善出版、共著者：田村毅、塩川徹也．西本晃二、鈴木雅生、他．博多かおるの執筆箇所：「花と女性:象徴、コミュニケーション、香り」(pp.172-173)、「フランス・オペラ」)(pp.242-243)、「貴族の文化とブルジョワの文化」(pp.350-351)、「風景と音」(pp.352-353)，「19世紀の食：定食屋、残飯屋、市場」(pp.354-356)、「フランス人の自画像：19 世紀パリと地方の風俗」(pp.356-357)、「変装と古着屋」(pp.368-369)、「ロマン派の芸術家たち：ジョルジョ・サンド、ショパン、リスト」(pp.370-371)、「幻想小説とファンタスティックなもの」(pp.372-373)、「ヴァンデ地方」(pp.530-531)、「ブルターニュ」(pp.532-533)、「コルシカ」(pp.600-601)，2012年.

６．研究組織

(1)研究代表者

博多　かおる（HAKATA KAORU）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・准教授

研究者番号：60368446